

北京音「我wo」の例外性について

中村雅之

1. 状況

果摂一等の韻母は現代北京音では、開口「-e」(/-ə/)、合口「-uo」(/-uə/)であるが、開口と合口の対立があるのは、現在では牙喉音に限られている。すなわち、牙喉音においては原則として「個gè」「過guò」のような対立があるが、舌歯音については、中古音で開口であった「多」「左」などもほとんどが合口化している。「他」「那」などは韻母の音形をも含めて個別的な例外と見なされる。また唇音は伝統的に開合の対立をもたず、北京音では「-o」(/-uə/と解釈してよい)になる。

ところが、牙喉音の中でも開合の状況が中古音と合わず、例外的な対応を示すものがいくつかある。代表的なものが「我」である。もともと開口であり、北京音としては「ě」という音形が期待されるが、実際には「wǒ」と合口になっている。また「和」「戈」「科」「課」などは逆に、合口が期待されるにもかかわらず開口になっている。なぜこのような例外が生じたのであろうか。

2. 平山説

「我」の例外的な音変化に説明を試みたものに平山久雄(1987)がある¹⁾。平山氏はまず舌歯音声母をもつ音節における合口化についてのメカニズムを次のように説明した。

舌歯音では、舌尖が歯茎付近に持ち上がるが、それに続く母音は後舌低母音の[a]で、調音に労力を伴う。果摂には韻尾がなく、母音が長めに発音されて舌位がゆっくりと移動するため、[a]の前に[u]のような渡りの母音が生じた。そこで韻母は[-üa]となり、ついには合口の[-ua]に合流した。

この説明では主母音を中古音の[a]としているが、主母音が[ʌ]あるいは[ɤ]に変化したあとで合口化が起こったとしてもこの説明が有効だという。北京語の「-e」が実際には[-üɤ]と発音される傾向にあることを傍証としている。

平山氏によれば、「我」についても同様のメカニズムが働いたという。そして牙

1) 平山久雄(1987)「論“我”字例外音變的原因」『中国語文』第6期(総第201期)。

喉音の中で「我」のみが合口化したのは、「我」が“輕読”されたからだという。

評者には平山説について十分に理解できない部分がある。もし仮に舌歯音における合口化の説明を認めるにしても、そのメカニズムが「我」にも適用されるのか、またなぜ輕読を条件に合口化するのか、理解不能であったことを告白しておく。

3. 南京官話の影響

平山氏が触れなかった問題として考慮に値するのは南京音の影響である。一般に、明清の官話では果摂一等の韻母は開口においても円唇母音であるが、とりわけ南京の官話音では開合の区別なく[-o]と発音された。西欧人のローマ字資料はおおむね南京音を標準としたが、果摂一等の開合については南京以外の地域の官話音をも参考にして開口「-o」、合口「-uo」のように表記することが多い。トリゴアの『西儒耳目資』が牙喉音の合口字を「-o」と「-uo」の双方のグループに収めているのは、南京官話音とともに他の地域の官話音をも勘案した結果であろう。

明清代に強い影響力をもっていた南京官話が、「我」の発音に関しても北京音に影響を与えたというのはそれほど無理な想定ではない。明代の南京官話音では「我」は[o]ないし[ɒo]と発音されたと思われるが、北京語でそれを受け入れる際には、[o]という単母音がなかったために[uo]と変形して受け入れたのだと考えられる。

北京音に対する南京官話音の影響の最たるものは、入声韻母の音形である。伝統的な北方音「学」[hiau]、「得」[təi]に対して、南京音[hioʔ]、[təʔ]を模倣した[hio](>[cyɛ])、[tə]が北京音に入り込んで、いわゆる「文言音」を形成した。語彙の面でも複数接辞が元代の「毎」から、明代には南京官話の「們」に置き換わるなど多方面で影響を受けている。このような南京官話の絶えざる影響を考慮すれば、「我」にも南京音の影響があったとしても不思議ではない。明代以降に生まれた北京語「我們」は語彙・発音において丸ごと南京官話の模倣であったということになる。

前述のように、果摂一等における開合の例外的対応は「我」のみならず、中古音で合口であった「和」「戈」「科」「課」などにも見られる。このような開合の混乱は、細部には複合的な要因があり得るとしても、本質的には、開合の対立をもたない南京官話音の影響によるものであったと考えられる。

4. 老乞大・朴通事のハングル注音

いわゆる「翻訳老乞大・朴通事」において、「我」のハングル注音は、15世紀中葉の北方音の状況を伝える左側音が「e」、そして文言音が大量に取り込まれた右側音が「o」と表記されている。この状況も、上に述べた仮説を裏付けるものと言える。ハングルという文字組織では構造的に「-uo」という形式を表記することが難しいため、右側音の「o」は実際には[uo]を意図したものと見なしてよい。伝統的な北方音(いわゆる白話音)を表記した左側音が「我」の発音を開口で表示するのに対して、南京官話音の模倣によって生まれた文言音が採用された右側音が「我」を合口としたのは実に示唆的である。北京音「我wǒ」は南京官話音の影響によって生まれたもので、その最も早期の記録が「翻訳老乞大・朴通事」の右側音だと考えられるのである。